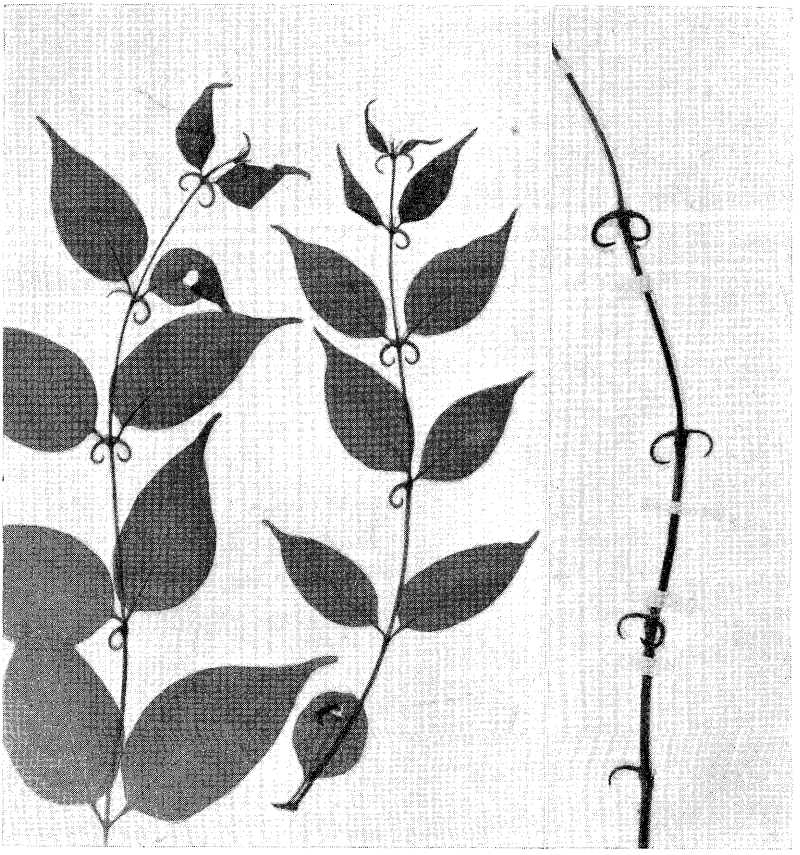
○カギカズラの枝の鉤の配置について（久内清孝） Kiyotaka HISAUCHI: On the arrangement of curved spurs of *Uncaria rhynchophylla*

カギカズラの鉤につき，花彙の図と流布本，たとえば牧野植物図鑑，寺崎の続日本植物図譜，また近くは大井氏の Flora of Japan にある井波一雄氏の図や，私の見た範囲の標本と一致しない点につき，本誌7月号に小文をのせておいたところ，小清水卓二博士から，下記の通りの示教をいただいたので，ここにそれを公表することにするが，そうなると，上記の諸書とともに，花彙の図をたしたものがカギカズラの姿となるわけである。小清水さんの示教は次の如し，Uncaria の鉤の出方につき，春日山のもので小生実験をした事がありますが，鉤は水平的の枝の場合には2個，1個，2個に出ますが，



カギカズラの鉤の配列を示す（右）多度山産（左）伊豆八幡野産

この枝を直立させると2個，2個，2個と出ます。自然の場合にはその枝の姿勢によって1-2-1，あるいは2-2-2になります。小生の実験はこの理由は鉤を生長させる生長作用物質 (growth hormone) の重力支配によるものと帰結しています（詳細は未発表）。即ち下面になると生長作用物質がそこに作用し，上面ですとその物が少く生長が止るわけです。dorsiventrality と growth hormone の分布とその作用機作の差異となると考えています。ついで，桑名の葛山博次氏は，岐阜県の養老山脈の東南端にある三重県多度山で，つぶさに，このことにつき追及された結果と標本を送りこされたが，それは，小清水さんの結果をうらがきされるものであったので，その後，伊豆八幡野産のものをよく見たところ，これにも同様な事実が見つかった。これらの事実から，2-1-2 と 2-2-2 のものとともにあることがはっきりした。しかし，後者の場合は普通でなく，茎の先端に近い部分の直立枝にたまたま現われるもので，常態ではなく小清水説のようなものであろう。したがって，鉤の着生形式には両方があるわけであるから，2-1-2 に限るようにきめるわけには行かないが，花彙の図のような枝ぶりのものに 2-2-2 は無理なような気がする。とにかく一般的には両方の場合のあることを附記した方がよいようである。とんだ人さわがせをいたしました。（東邦大学薬学部）

○鉤藤について（山崎　敬） Takasi YAMAZAKI: On *Uncaria rhynchophylla* in China

最近北村四郎博士はカギカズラが中国にもあると書かれた（植物分類，地理 **22**: 137, 1967)。このことはかなり以前から知られていたことで，華南あたりからだされている漢方薬の鉤藤 (kou-teng) の原植物は *Uncaria rhynchophylla*（カギカズラ）であるとされている。Merrill は Tsang が広東省従化で採集した標本を，*U. rhynchophylla* と同定して各地の標本室に送った。北村氏はこの標本をもとにして書かれ，また東大にも同じ番号の標本がある。しかるに中国のものは日本のカギカズラとやや異なるので，かねてから疑問に思っていた。中国の *Uncaria* 属の種類は侯寛昭氏 (How Foon Chew) が研究し，Sunyatsenia 6巻 (1946) に書かれている。残念ながら日本にはこの巻がないので，Merrill のいう中国のカギカズラが，どのようにあつかわれているかわからなかった。たまたまその中に *U. rhynchophylloides* How という新種がかかれているので中国のカギカズラはそれにあたるのかもしれないと考えていた。幸なことに侯氏は中国の *Uncaria* 属植物についての論文を，薬学学報 (**4**: 7-16 pl. 1-2, 1956) にのせているので，侯氏のカギカズラのあつかいがよくわかった。

侯氏は Merrill のいう中国の *U. rhynchophylla* はそのままカギカズラと同じものとしている。*U. rhynchophylloides* は全然別のものであった。中国の鉤藤と日本のカギカズラを区別していない。しかし侯氏の記載からみても日本のカギカズラとはちがいがある。日本のものはがく片は楕円形，花冠は無毛，花冠裂片は広楕円形でふちにはごく